福井県埋蔵文化財調査報告　第111集

竹原弁才天遺跡

－ 中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査９ －

２０１０

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

現在の福井市街地から越坂峠を越え九頭竜川左岸を通り勝山・大野へと至る街道は、古代以来の重要な幹線として、沿線には多数の遺跡が連なっています。特に白山平泉寺や在地武家の勢力拡大に伴い人・ものの往来も増えたと考えられ、館・寺院跡等中世の大規模遺跡の多さがそのことを示しています。

こうした遺跡のいくつかについて、中部縦貫自動車道建設に伴う工事に先立って、発掘調査を行ってきました。ここにその成果を報告する竹原弁才天遺跡もこのような16世紀を中心とした中世後期の館跡の一つであることが判明しました。

調査では、中世館跡の背後（山側）を守る施設群が発見されました。堀・土塁・切岸や、館内へ導水する石組み暗渠等を確認しました。これら一連の施設は中部縦貫自動車道建設関連の他の調査でも見つかっており、比較検討のための資料となります。また、遺構は伴わないものの縄文土器や石器等大昔から続く生活を窺い得る遺物も出土しており、九頭竜川沿岸の歴史を検討するための重要な資料として位置づけることができるでしょう。

今後、これらの資料が、九頭竜川左岸地域における埋蔵文化財に対する理解をより一層深める手がかりとなり、さらに本書が、学術研究・郷土史研究・学校教育等、各方面で広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮を頂きました地元関係各位・諸関係機関をはじめとする皆様に、深く感謝申し上げます。

平成22年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長　吉岡泰英

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが中部縦貫自動車道建設に伴い、平成16・18年度に実施した竹原弁才天遺跡（福井県吉田郡上志比村（現永平寺町）竹原所在）の発掘調査報告書である。

2　竹原弁才天遺跡の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主任河村健史、主査山本孝一、嘱託職員佐々木志穂（以上平成16年度）、主査宮崎認、嘱託職員日聖祐輔、同石川敦子（以上平成18年度）が担当した。

3　発掘調査は、平成16年6月14日から平成16年12月24日、平成18年7月11日から平成18年8月21日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成20年4月1日から平成21年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

4　本書の編集は河村があたり、主任月輪泰、河村、山本、主査御嶽貞義、同田中勝之が分担して執筆した。なお、執筆の分担は、以下のとおりである。

月輪泰　第1章第1節、第2章　　河村健史　第1章第2節、第3章、第4章第1節、第5章

田中勝之　第4章第3・5節　　御嶽貞義　第4章第2節　　山本孝一　第4章第4節

5　竹原弁才天遺跡に関する従来の成果発表と本書に齟齬のある場合は、本書を以て訂正したものと了解されたい。

6　検出遺構の写真撮影は河村・山本（16年度）、宮崎（18年度）が行なった。

7　本書に掲載した地形図および遺構図は、株式会社田中地質コンサルタント（平成16年度）、株式会社帝国コンサルタント（平成18年度）に委託して作成したものを合成し、一部改変して使用した。

8　本書における水平レベルの表示は、海抜高（m）を示し、方位は総て座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標第Ⅵ系に基づく。

9　遺構・遺物等の図化・図版作成は主任月輪、青木隆佳、河村、嘱託職員立壁肇、同藤本康司、同井之口茂が行なった。

10　出土遺物の写真撮影は河村、御嶽、田中が行なった。

11　遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真の縮尺は不同である。

12　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

13　本書の作成にあたり、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　副館長岩田隆氏にご助言・ご指導を頂いた。

14　発掘調査には地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

凡　　例

1　調査区内のグリット地区は10m単位とし、縦・横ラインの南西交点番号を以てグリット名称とする。

2　断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編　新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。

3　第4章遺物1～5節の各観察表の法量のうち、（　）数値は現状残存寸法をあらわす。

4　第2表備考らんについて、瀬戸焼は藤澤良祐「中世瀬戸窯の研究」平成20 高志書院、越前焼は田中照久「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現』出光美術館 平成6を参照した。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 4
第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　遺　　構 …… 8
第１節　遺跡の概要 …… 8
第２節　遺構各説 …… 12

第４章　遺　　物 …… 16
第１節　古代・中世の土器 …… 16
第２節　金属製品 …… 18
附　栗住波谷口遺跡の金属製品 …… 18
第３節　石製品 …… 19
第４節　縄文・弥生時代の土器 …… 20
第５節　石器 …… 21

第５章　ま　と　め …… 22

写真図版目次

図版第１　遺跡　16年調査区全景(合成)

図版第２　遺構　(1) 館内切岸(東より)
(2) 暗渠　水口(北より)
(3) 土塁１・堀１(西より)
(4) 土塁１・堀１(東より)

図版第３　遺構　(1) 暗渠　上部土塁除去後(北より)
(2) 暗渠　蓋石除去後(北より)
(3) 石敷遺構３
(4) 石積窯１背面(右　排煙孔)
(5) 石積窯　壁除去後
(手前石積窯2)

図版第４　遺構　(1) 16年度調査区平坦面４(東より)
(2) 土塁２・堀２(東より)
(3) 16年度調査区B全景(南より)
(4) 堀３(西より)

図版第５　遺物　(1)縄文・弥生土器
(2)中世　陶磁器・土師質土器
(3)中世　越前焼

図版第６　遺物　(1)竹原弁才天遺跡の金属製品
(2)栗住波谷口遺跡の金属製品
(3)石器・石製品

挿図目次

第１図　竹原弁才天遺跡位置図 ……1
第２図　現況測量図および座標区割図 ……3
第３図　福井県における竹原弁財天遺跡位置図 ‥4
第４図　遺跡周辺の地形模式図 ……4
第５図　周辺の遺跡分布図 ……7
第６図　遺構配置および地区割図 ……9－10
第７図　トレンチ３・15土層堆積図 ……11
第８図　中世館部南側土層堆積図 ……13
第９図　中世館部遺構図 ……14
第10図　石積窯遺構図 ……15
第11図　古代・中世の土器実測図 ……17
第12図　金属製品実測図 ……18
第13図　栗住波谷口遺跡の金属製品実測図 ……18
第14図　石製品実測図 ……19
第15図　縄文・弥生時代の土器実測図 ……20
第16図　石器実測図 ……21
第17図　中世館比較平面図１ ……24
第18図　中世館比較平面図２ ……25

表目次

第１表　遺構一覧 ……11
第２表　古代・中世の土器観察表 ……16
第３表　銭貨観察表 ……18
第４表　金属製品観察表 ……18
第５表　栗住波谷口遺跡の銭貨観察表 ……19
第６表　栗住波谷口遺跡の金属製品観察表 ……19
第７表　石製品観察表 ……19
第８表　石器組成表 ……21
第９表　石器観察表 ……21
第10表　各館防御施設比較一覧 ……24

第１章　調査の経緯と経過

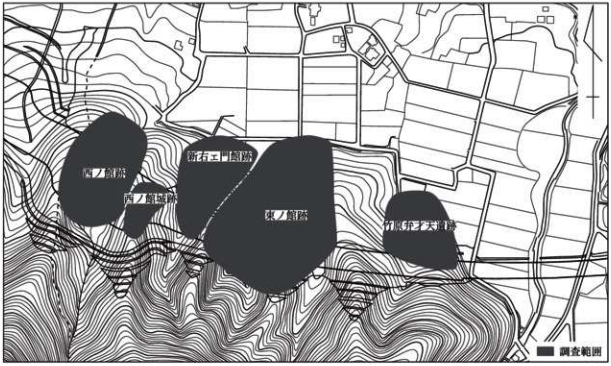
第１節　調査に至る経緯（第１図）

竹原弁才天遺跡は、福井県吉田郡永平寺町竹原字弁才天に所在する、中世館または寺院を主体とする遺跡である。地元の石上区でこの付近を「お寺山」と呼称し、平泉寺未坊が存在したと伝えるが、その他に史料は残されていない。現地には、屋敷地を画する土塁と堀が良好な状態で保存されていた[1]。

昭和62年に、国の道路審議会の答申により高規格幹線道路網の整備が計画され、県内では、福井市から長野県松本市を結ぶ中部縦貫自動車道の整備が具体化し始めた。この道路は、一般国道158号の自動車専用道路として計画され、総延長は約160kmにおよぶ。路線は、北陸自動車道福井北インターチェンジを起点として九頭竜川左岸を東進し、一般国道158号に沿う形で岐阜県内を通過して長野県松本市に至るものである。県内では「永平寺大野道路」と称する福井市玄正島町の北陸自動車道福井北インターチェンジから大野市中津川に至る延長26.4kmの区間について、事業着手することとなった。

工事は、本線に先立ち、並行する一般国道364・416号のバイパス道建設から着手された。工事に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）は、平成元年から永平寺町諏訪間興行寺遺跡、同７年から同町袖高林古墳群の発掘調査を実施した[2]。また、この間平成元年以降、埋文センターによる詳細分布調査が実施され、平成６年には、「永平寺大野道路」区間の遺跡分布状況が確定した。その結果、従来の周知の遺跡以外にも、本遺跡を含めた新たな遺跡が発見された。その後、計画路線内に存在する遺跡について、範囲や遺存状況および時期などの具体的内容を把握するための試掘調査が行われ、発掘調査が本格化しはじめた。

埋文センターは、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局福井河川国道



第１図　竹原弁才天遺跡位置図（縮尺1/5,000）

事務所。以下、国土交通省）と協議し、本格的発掘調査として、先ず平成10年７月から勝山市鹿谷町保田城山古墳群[3]の調査を実施した。この間、国土交通省の工事計画が勝山インター優先となり、引き続き平成11年８月から同町発坂山ノ端遺跡[4]、同年11月からは同町志田神田遺跡の調査に着手した。また、同年には永平寺町の旧上志比村域でも工事計画が進展し、埋文センターは、同年８月から市荒川興行寺遺跡[5]、翌平成12年度には藤巻館跡[6]および浅見金道口遺跡[7]の発掘調査に着手した。

竹原弁才天遺跡の試掘調査は、平成12年に埋文センターが実施した。調査対象地の館跡平坦面および東西に伸びる堀と土塁、さらに堀背後の山裾に広がる緩斜面においてトレンチを設定し、遺存状況と周辺における関連遺構の有無を確認した。その結果、館跡本体においては平坦面の造成や堀と土塁の構築状況が確認でき、背後の緩斜面でも土壙やピットを検出した。また、遺物は越前焼など中世陶磁器のほか、縄文土器や石器が出土している。さらに、異なる時代の遺物が出土していることから、遺構面が２面存在すると推定された。

この結果を受け、国土交通省と福井県教育庁文化課および埋文センターが協議を行い、記録保存のための緊急発掘調査が行われることとなった。調査対象面積は、当初遺構面を２面と考え、延べ3,800㎡としていたが、調査が進む中で１面であることが判明し、一方で工事計画の変更に伴う調査対象範囲の拡張が必要となったため、国土交通省と埋文センターが協議し、2,650㎡となった。また、発掘調査は平成16年度に、当時未買収であった対象範囲を除く部分において着手することとなった。

第２節　調査の経過

調査直前の遺跡の状況は、僅かに土塁らしい高まりを残す調査区北半の館部分と、山裾の緩斜面で遺跡の状況が把握できない南半部分に分けられる。山部分は、中央付近が他の箇所に比べ勾配が緩やかで扇状地状であることから、洪水等により谷が埋没し、本来の平坦面がこの下に存在する可能性を想定した。また、試掘報告ではトレンチ１で遺構の存在を指摘されていたため、試掘時のトレンチを帯状に南北方向へ延長し、遺構面の確認を優先した（トレンチ１・３・６；番号は試掘時のトレンチと対応）。また、試掘坑掘削と並行し、人力による表土の除去をおこなった。トレンチ１・３・６の調査および表面精査の結果、遺構面は確認されなかった。

調査区から外れた山側（北側）の急斜面で、重機通行用に掘削されていた仮道の壁面で黄色い山土を切り込む土坑状の黒色土が確認された。工事影響範囲内であるため遺構と思しき落ち込みを中心に周辺を精査したが遺構・遺物とも確認されなかった（16年調査区Ａ）。

10月、工事用道路部分の調査が可能となり、16年調査区Ｂが設定された。この地区は山上からの流路に当たるため、排水溝を掘削の上、水流の影響が少ない場所でトレンチ15を設定した。

平成18年、部分的に未買収であった部分（18年調査区Ｃ・Ｄ）について調査をおこない、竹原弁才天遺跡の全調査が終了した。以下、調査区毎に作業の経過を記述する。

平成16年度調査区（調査区Ａ含む）

平成16年	６月14日	現地作業開始　下草除去、基準座標杭設置。18日/現況測量　人力による表土剥ぎ。トレンチの設定
	７月	館部土塁・堀切調査開始　集石周囲精査
	８月	調査区緩斜面東半分表面精査、黒色土層掘削。調査区東半南側調査区を通る工事用仮道の断面で、遺構らしい落ち込みを確認。調査区Ａを設定、調査を行う。
	９～10月	東半黒色土層の掘削。炭焼窯と考えられる石積窯の調査

11月　　空測に向け全面清掃。14日/ヘリによる航空測量。全景写真撮影。石積窯側壁を外し解体・写真撮影・図化。土塁の解体・下面調査。

12月　　館部分（切岸下）精査、掘削終了。館部補足測量・写真撮影。24日完全終了・撤収

平成16年度追加調査区Ｂ

平成16年 9月　　遺存状況確認のため南北方向トレンチ掘削。上面精査

10月　　表土掘削。遺構精査。小川流路に当たるため水により精査が困難。

11月10日　ヘリによる航空測量。全景写真撮影。遺構面下さらに掘削、精査するも遺構等確認されず。25日/終了。

平成18年度調査区Ｃ・Ｄ

平成18年 7月　　調査開始。器材設置、包含層掘削。13日/基準杭設置。遺構精査・確認。遺構掘削。

8月4日～ 電子平板測量。写真撮影。遺構掘削・図化。21日/調査終了。

註

1　上志比村1978『上志比村史』

2　冨山正明編 2008『諏訪間興行寺遺跡－国道416号線改良工事に伴う緊急調査－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
　御嶽貞義編1999『袖高林古墳群』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

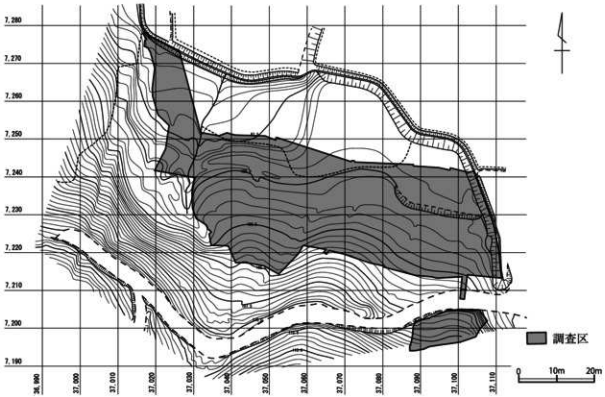
3　清水孝之編 2002『城山古墳群－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査１－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

4　坪田聡子編 2004『発坂山ノ端遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査３－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

5　月輪泰編 2004『市荒川興行寺遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査２－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

6　月輪泰・宮崎認編 2007『藤巻館遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査５－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

7　鈴木篤英編 2006『浅見金道口遺跡、三重山城跡、浅見東山遺跡－中部縦貫自動車道建設に伴う調査－』
　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



第２図　現況測量図および座標区割図（縮尺1/1,000）

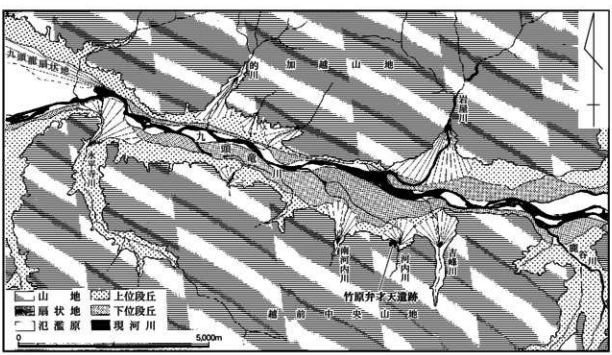
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（第３・４図）

竹原弁才天遺跡は、福井県北部の吉田郡永平寺町竹原字弁才天に所在する。福井県は、本州中央部の凹部に位置し、西側は日本海に面している。東西約130㎞、南北約100㎞を測り、面積は、約4,189㎢を測る。福井県は、敦賀市の北東部にある木ノ芽山嶺を境として、行政的には北を嶺北地方、南を嶺南地方と呼称する。遺跡の所在する永平寺町は、嶺北地方の北部中央に位置する。本遺跡の北方には、大野市から坂井市三国町に到る九頭竜川が西流する。この九頭竜川中流域には、北を加越山地に、南を越前中央山地に挟まれた幅約1.5㎞の志比地溝が存在する。志比地溝は、西側の坂井平野と東側の勝山盆地を連結し、長さ約13㎞を測る。九頭竜川両岸には河岸段丘が発達し、標高約40～50ｍの下位段丘と、標高約50～70ｍの上位段丘の２段に大別される。また、九頭竜川には、加越山地から的川、岩屋川などが、越前中央山地から吉峰川、河内川、南河内川、犀川、永平寺川などが、下流域の上位段丘に扇状地を形成しつつ合流する。

本遺跡は、越前中央山地の仙尾山（標高826ｍ）より北に延びる山稜の北東端山麓に位置する。この山麓一帯は、山稜から派生する低丘陵群と谷で構成され、さらに谷から前面の上位段丘にかけては、山稜の自然崩落による緩斜面となる。本遺跡は、この傾斜変換点に築かれている。なお、本遺跡の西には、尾根を境にして「東ノ館」、「新右衛門館」、「西ノ館」と称する堀と土塁を伴った館跡が小谷内に連続

第３図　福井県における竹原弁才天遺跡位置図（縮尺1/2,000,000）



第４図　遺跡周辺の地形模式図（縮尺1/100,000）

し、それぞれを遮る尾根は、単なる境界としてだけでなく天然の防御施設としても機能している。

第２節　歴史的環境（第５図）

本遺跡の所在する永平寺町東部の旧上志比村域では、前述の福井県教育委員会による県内全域にわたる詳細分布調査や、中部縦貫自動車道建設工事計画路線内での分布調査により、新たに多数の遺跡の存在が確認された。また、本遺跡をはじめ埋文センターが実施した発掘調査により、新しい事実も判明しつつある。ここでは、これまでの成果をもとに、本遺跡周辺に所在する遺跡の概要を記す。

縄文時代　散布地を主とする16遺跡が確認されており、比較的広く分布する。発掘調査を実施した遺跡では、縄文時代を主体とする遺跡はほとんど無く、土器や石器などを少量出土する遺跡が大半を占める。これらは山麓部に位置し、狩猟採集等の生業活動に伴う遺跡であることがうかがえる。藤巻館遺跡（５）では、尾根上で縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半の住居跡等の遺構を検出したほか、晩期を中心に早期後半・中期前葉の土器も出土し、打製石斧・石鏃・石材の剥片・石皿・石冠・独鈷石等の石器が出土している。栗住波谷口遺跡（23）では、土坑１基から晩期後半の１個体分の土器が出土した。包含層から環状石斧も出土している。このほか市荒川興行寺遺跡（２）では草創期の有形尖頭器や局部磨製石斧、藤巻多珍坊遺跡（６）では中期後葉および後期中葉の土器と尖頭器、浅見金道口遺跡（40）では黒曜石製石匙や打製石斧、東ノ館跡（17）、新右衛門館跡（18）、西ノ館跡（20）、大月前山遺跡（32）、浅見堂ノ北遺跡（41）の発掘調査で、土器や石器の散布が確認された。そのほか、市荒川遺跡（３）は、山麓から河岸段丘化した丘陵先端にかけて遺物の散布が認められ、中期後葉～晩期初頭の土器とともに打製石斧・石皿・磨石・石錘等の石器が採集されている。

弥生時代　発掘調査を実施した遺跡の中では、前述の藤巻館遺跡（５）において縄文時代晩期後半～弥生時代の竪穴住居を検出したに止まり、山麓部における生活痕跡はほとんど認められない。ほかにも、清水細割遺跡（27）など平地の遺跡で、遺物の散布を確認しているに止まる。

奈良・平安時代　散布地を含めて17遺跡が確認されており、比較的広く分布する。この内、藤巻多珍坊遺跡（６）では、８世紀後葉～９世紀初頭の須恵器窯３基が検出され、灰原から多量の須恵器が出土した。多量の須恵器・土師器とともに墨書須恵器・奈良三彩陶器・陶硯等が出土し、大規模な掘立柱建物が１棟検出され、寺院に関連した遺跡と考えられている浅見金道口遺跡（40）と、出土した須恵器・土師器に鉄鉢や瓶が含まれ、寺院または祭祀関連遺跡とみられる浅見堂ノ北遺跡（41）から出土した須恵器は、藤巻多珍坊遺跡の須恵器窯から供給された可能性が高いと考えられている。このほか、藤巻館遺跡（５）、栗住波谷口遺跡（23）、大月前山遺跡（32）で９世紀代の須恵器と土師器が少量出土しているが、明確な遺構は検出されていない。

中世　寺院跡・館跡・山城跡・散布地など26遺跡が確認されており、広く分布する。この内、寺院跡や館跡の大半は山麓に位置し、堀や土塁など構築物が残存するものが多く、伝承や文献史料による推定地とされる場合もある。市荒川興行寺遺跡（２）は、浄土真宗寺院興行寺の旧跡で、左右の谷川を堀に見立て土塁に区画された境内跡が保存されている。発掘調査では、堀と土塁の一部と、南に隣接する小規模屋敷跡を検出し、15世紀～16世紀代の土器・陶磁器類が出土した。藤巻館遺跡（５）は、『越前国古城跡並館屋敷蹟』に朝倉氏の家臣南部勘解由左衛門義綱の館跡と記され、字名に「勘解由殿」が残る。発掘調査では、堀と土塁で区画された館内の数段の造成面において礎石建物や掘立柱建物を検出し、16世紀～17世紀初頭の土器・陶磁器類が出土した。館の背後に当たる南方山上には、堀切を伴う山城

跡の藤巻城（４）も築かれている。藤巻多珍坊遺跡（６）は、白山平泉寺の末坊跡と伝承される。尾根を挟んで北と南西に屋敷地が造成されており、発掘調査では、雛檀状の造成面で礎石建物や掘立柱建物を検出し、16世紀後半～17世紀初頭の土器・陶磁器類が出土した。南西部の屋敷地には、南面を区画する堀と土塁が築かれている。栗住波谷口遺跡（23）は堀・土塁を伴う館跡で、出入り口を虎口とし、石垣も伴う。内部は大小の礎石建物が配置され、池と思える方形の石敷遺構も検出した。遺構面は３時期あり、16世紀初頭～末期の遺物が出土している。大月前山遺跡（32）では、発掘調査により、石垣で区画した寺院跡と、土塁と堀を伴う館跡を検出した。いずれも主に16世紀～17世紀初頭の遺物が出土している。東ノ館跡（17）・新右衛門館跡（18）・西ノ館跡（20）は、本遺跡西側の山麓に位置し、堀と土塁を伴う。いずれも16世紀～17世紀初頭の遺物が出土している。このほか、平泉寺末坊の伝承のある辰ノ坊跡（10）は、発掘調査はされていないが外周に堀と土塁を巡らせた、東西約60ｍ、南北約80ｍ余りの長方形区画が現存する。上記のように、発掘調査により、山麓部における館跡・寺院跡の様相は明らかになりつつあるが、平地部における同時期の集落については、散布地の存在を知るにとどまっている。

引用・参考文献

青木隆佳編 2007『栗住波谷口遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査６－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

上志比村 1978『上志比村史』

河村健史 2006「竹原弁才天遺跡」『年報20　平成16年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

工藤俊樹編 1988『鳴鹿手島遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

鈴木篤英編 2006『浅見金道口遺跡・三重山城跡・浅見東山遺跡－中部縦貫自動車道建設に伴う調査－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

月輪泰編 2004『市荒川興行寺遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査２－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

月輪泰 2006「大月前山遺跡」『年報20　平成16年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

月輪泰 2008「東ノ館跡・新右衛門館跡」『年報22　平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

月輪泰 2009「西ノ館跡・西ノ館城跡」『年報23　平成19年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

月輪泰・宮崎認編 2007『藤巻館遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査５－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

日本地誌研究所編 1970『日本地誌』第10巻

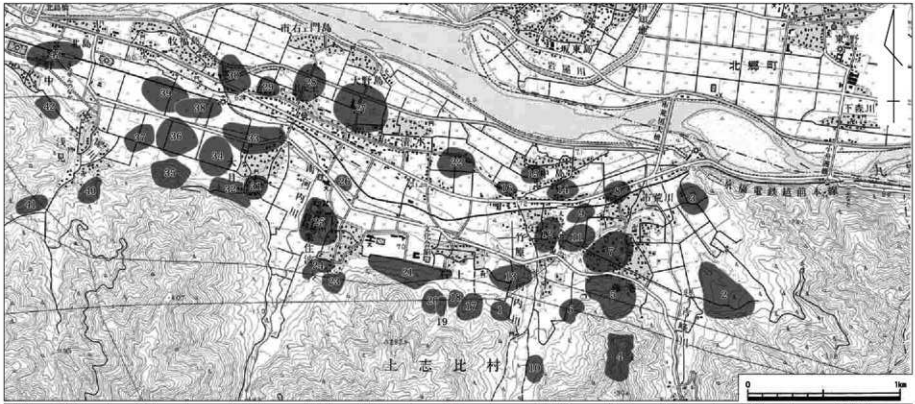
野路昌嗣 2008「西ノ館跡・西ノ館城跡」『年報22　平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県教育委員会 1993『福井県遺跡地図』

宮崎認 2007「大月前山遺跡」『年報21　平成17年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

宮崎認 2008「浅見堂ノ北遺跡」「大月前山遺跡」「竹原弁才天遺跡」『年報22　平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

山本孝一編 2008『藤巻多珍坊遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査７－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



番号	遺跡名	種別	主な時代	番号	遺跡名	種別	主な時代	番号	遺跡名	種別	主な時代
1	竹原弁才天遺跡	館跡・散布地	縄文・中世	15	中島西中道遺跡	散布地	中世・近世	30	牧福島五反田遺跡	散布地	縄文・弥生・平安
2	市荒川興行寺遺跡	寺院跡・散布地	縄文・中世	16	中島前田遺跡	散布地	中世・近世	31	大月中垣内遺跡	散布地	奈良・平安・近世
3	市荒川遺跡	散布地	縄文	17	東ノ館跡	館跡	縄文・中世・近世	32	大月前山遺跡	寺院跡・館跡・散布地	縄文・平安・中世・近世
4	藤巻城跡	城跡	中世	18	新石衛門館跡	館跡	縄文・中世・近世				
5	藤巻館遺跡	集落跡・館跡	縄文・弥生・平安・中世	19	西ノ館城跡	館跡	中世・近世	33	大月渡瀬遺跡	散布地	奈良・平安・近世
6	藤巻多珍坊遺跡	窯跡・寺院跡・館跡	縄文・平安・中世	20	西ノ館跡	館跡	縄文・中世・近世	34	大月村下遺跡	散布地	縄文～古墳・近世
				21	道東口遺跡	散布地	縄文	35	浅見東山遺跡	石灰窯跡	近世
7	藤巻南上野遺跡	散布地	縄文・近世	22	石上宮ノ前遺跡	散布地	奈良～近世	36	小名辺遺跡	散布地	縄文～中世
8	藤巻内嶌遺跡	散布地	中世・近世	23	栗住波谷口遺跡	館跡・散布地	縄文・平安・中世	37	浅見石堀遺跡	散布地	弥生～平安
9	藤巻市野遺跡	散布地	縄文	24	栗住波上中道遺跡	散布地	奈良～近世	38	大月南田島遺跡	散布地	奈良・平安
10	妙ノ坊跡	寺院跡	中世	25	栗住波神田遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良～近世	39	牧福島住吉遺跡	散布地	弥生・奈良～近世
11	竹原柳田遺跡	散布地	奈良・平安	26	栗住波蟹原遺跡	散布地	中世・近世	40	浅見金道口遺跡	寺院跡・散布地	縄文・平安・中世・近世
12	竹原清水下遺跡	散布地	中世・近世	27	清水細割遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	41	浅見堂ノ北遺跡	寺院跡・散布地	縄文・平安
13	竹原駅入保遺跡	散布地	奈良～中世	28	山王東有森遺跡	散布地	弥生・奈良～近世	42	野中村西遺跡	散布地	奈良・平安
14	中島村内遺跡	散布地	奈良～近世	29	山王西有森遺跡	散布地	縄文～古墳・中世・近世	43	野中北神田遺跡	散布地	奈良～近世

第５図　周辺の遺跡分布図（縮尺 1/25,000）

第３章　遺構

第１節　遺跡の概要

層序（第７図）　調査区南側の山裾部分では試掘時に掘削された３箇所の試掘溝を調査区範囲を南北に延長して設定したが，層厚に差こそあれ，概ね類似した堆積様相を呈する。トレンチ３では褐色の表土層，黒色土層，さらに褐色土層と，山の地形に沿い水平堆積する。褐色土層以下で遺物は確認されなかった。

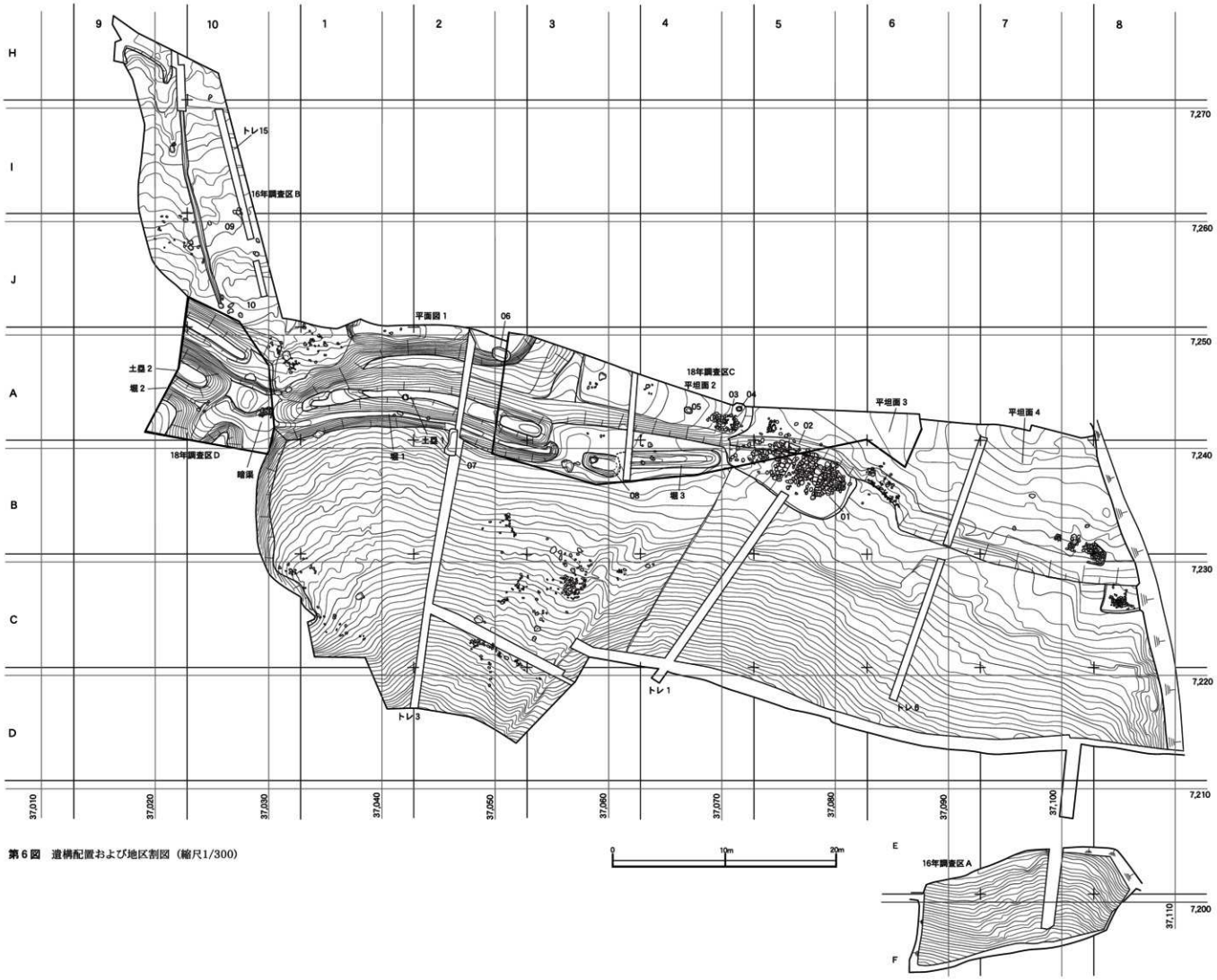
館背後部分（第７・８図）　黒色土層を生活面とし，黒色土上面に土塁が盛られ，堀が切り込む。土塁北側では1.4ｍ切り込み館内の生活面を形成するが，切岸部分を観察すると，黒色土と褐色土が互層で堆積する状況が見られた。館内に含まれると思われる拡張区では0.1ｍ厚の表土を除去すると粘性の強い褐色土層が確認された。礎石等遺構もこの上面で確認されることから，この層上が館の生活面と考えられる。以下最大1.3ｍ掘削したが遺物・遺構とも確認されなかった。

遺構分布（第６図）　調査区の状況は，南側山手・北東側平坦部分・北西側の中世館部に大別される。南側山手（Ｂ～Ｅ－１～８区）では先述（第１章２節）のとおり遺構は確認されなかった。

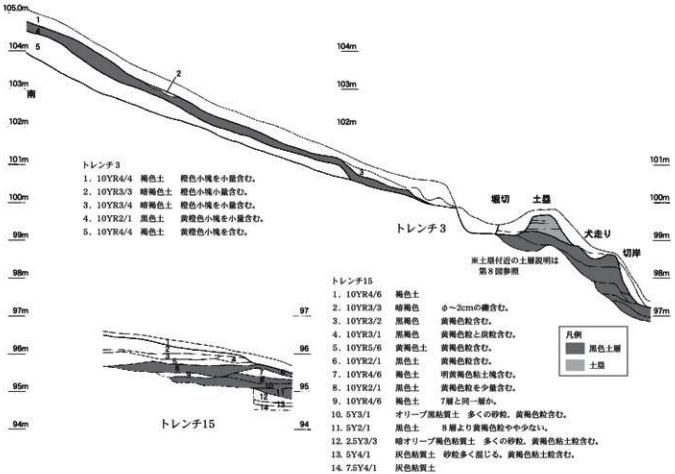
調査区北東（Ｊ～Ｂ－３～８区）では平坦面２・３・４が確認された。平坦面２（18年度調査区Ｃ）は斜面を上がると堀３が控える。周囲の遺構や土師質皿等少量の遺物出土から館に関連する平坦面と考えられる反面，堀３横に土塁がない，平坦面で遺構が確認できない，斜面と堀３が平行に配置されていない等の観点から，中世館の平坦面を利用しつつ近代以降に改変されている可能性もある。石敷き遺構３はこの平坦面２の東端で確認された。平坦面３・４では褐色土と黒色土が互層で厚く自然堆積している。中世の遺物・遺構共殆ど確認できなかったことから，中世に平坦面の原形があったにせよ，近代以降に耕作地として削平され平坦面が整備されたと考えられる。平坦面４周辺のＢ･Ｃ－６～８区の黒色土層下で縄文・弥生土器が出土したため，精査をおこなったが遺構は確認できなかった。Ｂ･Ｃ－８区で付近の山石を集めた集石が確認され，調査をおこなったが，集積下部に遺構の痕跡は確認できなかった。

調査区北西側は中世館部分にあたる。堀・土塁・切岸等館の背後を守る諸施設が良好な状況で検出された。ただし，館の生活面と目される平坦面１は調査区外となり，館内部の状況についてその様子を窺うことは出来なかった。平坦面１は東西幅15ｍ，床面は海抜96.82ｍである。西端で段が付き，平坦面１が0.5ｍ低くなるため，16年度調査区Ｂや暗渠と空間的に分離される。後述する（第４章３節）中世遺物のほとんどはこの平坦面１内から出土している。また，遺物が土師質皿（灯明皿）と擂鉢・甕（越前焼）に限られ，しかも狭いわずかな場所に集中するのは，切岸際の平坦面１南側空間の性格を考える上で重要な意味を持つものと思われる。

16年度調査区Ｂは薄い表土を剥ぐと，層厚0.1～0.2ｍの黄色土層が確認され，生活面と考えられる。また南から北へ緩やかに傾斜し，比高差は0.9ｍある（第５図トレンチ15）。但し，調査時まで暗渠の水は調査区Ｂの中央を流れていたことや，確認された遺構は土塁２際の礎石列１・２のみであることから遺構面が流されている可能性もある。いずれにせよ将来館部分の調査の中で平坦面１や調査区Ｂの空間的位置付けがなされることと思われる。



第6図　遺構配置および地区割図（縮尺1/300）



第７図　トレンチ３・15土層堆積図（高さのみ　縮尺1/100）

第１表　遺構一覧

遺構番号	地　区	グリッド	法量(単位:m)			種　別	時　期	備　考	主 な 遺 物
			長　辺	短　辺	深　さ				
平坦面　1	16年調査区	J-1・2	東西15	確認1			16世紀	南北長は調査確認分のみ	土師質皿、越前焼甕・擂鉢
平坦面　2	18年調査区C	A-3・4	東西15	確認4				南北長は調査確認分のみ	古瀬戸卸皿、唐津？鉢
平坦面　3	18年調査区C	A-5・6	東西15	確認2.6				南北長は調査確認分のみ	
平坦面　4	16年調査区	A・B6～8	東西残20	確認10.8				南北長は調査確認分のみ	
堀　1	16年調査区	A-1～3	24.6	1.9	1	堀	16世紀		
堀　2	18年調査区D	A-9	残3.2	2.2		堀	16世紀		
堀　3	18年調査区C	B-4	12	1.4	0.32	堀	16世紀		
土塁　1	16年調査区	A-1～3	24	基底部2.2	0.5	土塁	16世紀		
土塁　2	18年調査区D	A-9	残4.8	基底部2.8	0.55	土塁	16世紀		
暗渠	18年調査区D	A-10	全長1.8	水口幅0.25	水口高0.4	石組暗渠	16世紀	山石を側壁・蓋石に使用	
石積窯 01	16年調査区	B-5	最大長3.2	最大幅2.6		石積窯	近代	炭窯？	
石積窯 02	16年調査区	B-5	最大長3.6	最大幅3.3		石積窯	近代	炭窯？	
石敷遺構 03	18年調査区C	A-4	最大長2.2	最大幅1.45		石敷遺構	16世紀？		
土坑 04	18年調査区C	A-4	直径0.43		0.25	土坑		Pit1	
土坑 05	18年調査区C	A-4	0.69		0.1	土坑		Pit2	
土坑 06	16年調査区	A-2	1.5	1.1	0.21	土坑			
土坑 07	16年調査区	J-10	2.2	1.4	0.55	焼土坑	近代？		
土坑 08	18年調査区C	B-3	(3.4)	(1.9)		堀？		堀１と関連するか	
礎石列 09	16年調査区B	J-10	1.8			礎石列		２間分３石、川原石	
礎石 10	16年調査区B	J-10				礎石		１石のみ、川原石	

第２節　遺構各説

主な遺構は、中世館に関連する堀・土塁、切岸下の生活面の土坑・礎石等である。また、近代と考えられる窯跡２基も確認された。

１　中世館関連の遺構（第８・９図）

堀１　館背面と考えられる南側を区画する。幅1.9m、深さ１m。底部の標高は東側で98.97m、西側で98.88mを測る。北東角で北へ曲がるがわずか0.3mで止まる。南面は全長24.6mを測る。直線ではなく弓形に緩やかに曲がる。北西部は谷筋と直角に合流する。断面は薬研または逆台形である。

堀２　谷筋を挟み、堀切１から西へ延長する。調査区の関係上確認されたのは3.2mまでである。底部は標高99.19mである。

堀３　堀１の東側延長上に位置する。一文字形で総延長は12m。ただし西側は土壇（堀）08に切られるため土橋通路の幅は広がる可能性が高い。堀１と３の間2.6mは掘り残され、土橋状通路とする。深さ0.32m、底部の標高は99.64mである。

土塁１　堀１と対となる。堀切上面から最高部で0.5m、堀底との比高差は1.44mである。土塁の館内側は、最高部から1m下がりに幅1mで犬走りを設ける。犬走りは土塁１の東端部位置に合わせて北へ屈曲する。犬走りより下、遺構面まで切岸として1.4mまで下がる。土塁２との間6mの土塁の低くなる部分は館建設当初からこの状態であったのか、自然流路の水を流すために壊したのかは不明である。

土塁２　堀２と対となる。堀底との比高差は0.55mである。館内側は土塁２に溝が沿う。比高差は1.8mである。さらに溝の北側はわずか0.2m上がる。本来犬走りであったものを0.6m削られたものか。遺構面までの比高差は1.24mである。直下に礎石列１がみられる。

暗渠　現代まで川筋となり水流がある。付近の山石を使用し、左右１段程度壁石を据え、天井石を被せる。さらに屋敷内側の水門部分は天井・側石共に大振りなものを使用する。水道幅は0.2m、現存長1.8mである。南側（上流側）の水門石組の石材は小さく、土塁の奥まった部分で確認されていることからこの部分は亡失している可能性がある。本来、土塁１と２を繋ぐ土塁があったと思われるが、標高98.81mまでの高さしか残されていない。

礎石列09　２間分３石のみ残る。柱間は0.9m、方向は土塁２に平行する。石は川原石である。

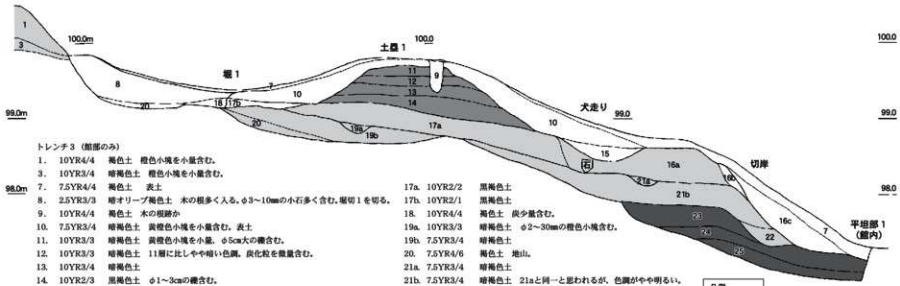
礎石10　石材が礎石列09に同じ上面が平らな川原石であることから、１石のみながら礎石とした。

土坑04　直径0.43m、深さ0.24m、底部に拳大の山石を多く含み、掘立柱の根巻きの可能性もある。

石敷遺構03　堀３の北端に当たる。最大長2.2m、最大幅1.45m。東側は一辺0.2~0.3mの石が巡り、西側は開く。底面中央部1.1×0.3mは敷石が欠ける。構造的には次の石積窯01・02と類似するが確認された面が中世と見られることや付近で土師質皿が確認されていることから、時期は16世紀まで上がる可能性がある。

２　近代以降の遺構（第10図）

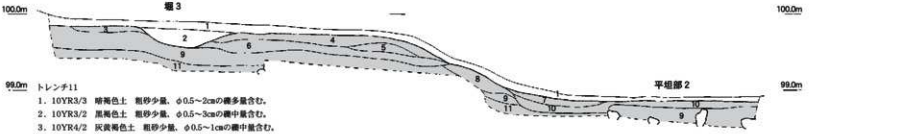
石積窯01・02　調査区北東の平坦面に築かれる。01・02とも類似した構造を持つ。もっともよく残る石積窯02は、最大長3.6m、最大幅3.3m。平面形は「U」字形である。地上式で北側に焚口を設け、南側に排煙孔が残存していた。床面には１辺0.4～0.5mの板石を敷き詰める。窯壁は土作りの芯部分の両側に１辺0.2~0.3m程度の石を積み重ね、土で塗り固め壁とする。築造順序は、まず東側の石積窯01が築かれ、その後石積窯01の西壁を破壊し、この上に石積窯02を築く。直接遺物は出土していないが、近代に築造された炭窯と推定される。



トレンチ3（館部のみ）

1. 10YR4/4 褐色土 橙色小塊を小量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 橙色小塊を小量含む。
7. 7.5YR4/4 褐色土 表土
8. 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色土 木の根多く入る。φ3～10mmの小石多く含む。堀切1を切る。
9. 10YR4/4 褐色土 木の根跡か
10. 7.5YR3/4 暗褐色土 黄橙色小塊を小量含む。表土
11. 10YR3/3 暗褐色土 黄橙色小塊を小量。φ5cm大の礫含む。
12. 10YR3/3 暗褐色土 11層に比しやや暗い色調。炭化粒を微量含む。
13. 10YR3/4 暗褐色土
14. 10YR2/3 黒褐色土 φ1～3cmの礫含む。
15. 10YR3/4 暗褐色土
16a. 10YR2/3 黒褐色土
16b. 10YR2/3 黒褐色土 16aよりやや黒い。
16c. 10YR2/3 黒褐色土 16aと同一
17a. 10YR2/2 黒褐色土
17b. 10YR2/1 黒褐色土
18. 10YR4/4 褐色土 炭少量含む。
19a. 10YR3/3 暗褐色土 φ2～30mmの橙色小塊含む。
19b. 7.5YR3/4 暗褐色土
20. 7.5YR4/6 褐色土 地山。
21a. 7.5YR3/4 暗褐色土
21b. 7.5YR3/4 暗褐色土 21aと同一と思われるが、色調がやや明るい。
22. 10YR2/3 黒褐色土 φ1～4cm橙色小塊を小量含む。
23. 10YR2/3 黒褐色土 22よりやや暗い。
24. 10YR3/3 暗褐色土 地山か
25. 10YR3/2 黒褐色土

トレンチ3（館部分のみ）

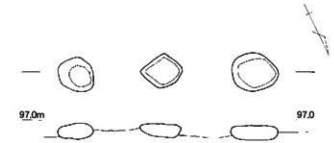


トレンチ11

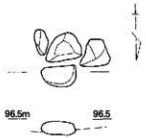
1. 10YR3/3 暗褐色土 粗砂少量、φ0.5～2cmの礫多量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 粗砂少量、φ0.5～3cmの礫中量含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 粗砂少量、φ0.5～1cmの礫中量含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 粗・固化礫粒砂少量、φ0.5～3cmの礫中量含む。
5. 10YR3/2 黒褐色土 粗砂・固化礫粒少量、φ0.5～3cmの礫中量含む。
6. 10YR3/2 黒褐色土 粗砂少量、φ0.5～1cmの礫中量、固化礫粒少量含む。
7. 10YR3/3 暗褐色土 粗砂少量、φ0.5～3cmの礫中量、φ5cmの礫・固化礫粒微量含む。
8. 10YR3/2 黒褐色土 粗砂少量、φ0.5～2cmの礫中量含む。
9. 10YR2/1 黒色土 粗砂・φ3～10cmの礫少量、φ0.5～2cmの礫、固化礫粒中量含む。
10. 10YR3/2 黒褐色土 粗砂・固化礫粒少量、φ0.5～2cmの礫中量含む。
11. 10YR3/3 暗褐色土 粗砂少量、φ0.5～3cmの礫・固化礫粒中量含む。

トレンチ11

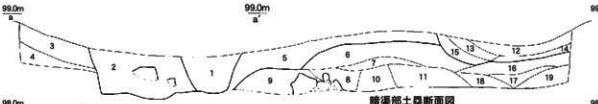
第８図 中世館部土層堆積図（縮尺1/50）※断面位置は第６図参照



礎石列09



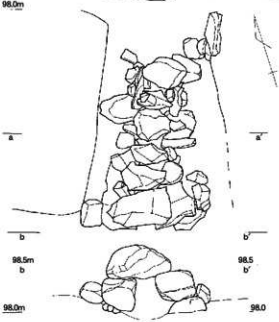
礎石列10



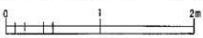
暗渠部土層断面図

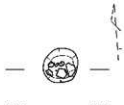
暗渠部土層

1. 10YR6/6　暗黄褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫中量。φ2cmの礫・固化礫微量含む。
2. 7.5YR4/4　褐色土　粗砂少量。φ0.5～1cmの礫中量含む。
3. 10YR4/4　褐色土　粗砂・φ0.5～3cmの礫少量含む。。
4. 10YR3/3　暗褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫・固化礫少量含む。
5. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫中量含む。
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粗砂少量。φ0.5～2cmの礫中量。φ5～12cmの礫。固化礫少量。
7. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　細砂。粗砂少量。φ0.5～1cmの礫微量含む。
8. 10YR4/2　灰黄褐色土　粗砂・φ3～10cmの礫・固化礫少量含む。
9. 10YR4/4　褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫少量。φ5～25cmの礫中量含む。
10. 10YR3/1　黒褐色土　粗砂・φ2～15cmの礫中量。φ0.5～1cmの礫・固化礫少量含む。
11. 2.5YR2/1　黒色土　粗砂・φ0.5～7cmの礫・固化礫少量含む。
12. 10YR6/6　暗黄褐色土　粗砂・固化礫少量。φ0.5～1cmの礫微量含む。
13. 10YR4/4　褐色土　粗砂少量。φ0.5～1cmの礫微量含む。
14. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫微量。固化礫・灰黄褐色土少量含む。
15. 10YR4/4　褐色土　粗砂・固化礫少量。φ0.5～1cmの礫微量含む。
16. 10YR4/2　灰黄褐色土　細砂・粗砂・φ0.5～1cmの礫微量。固化礫少量含む。
17. 10YR4/1　褐灰色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫微量。固化礫少量含む。
18. 2.5YR4/3　オリーブ褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫微量。固化礫少量含む。
19. 2.5YR5/3　黒褐色土　粗砂・固化礫少量含む。φ0.5～1cmの礫微量含む。



暗渠・水門平・立面図

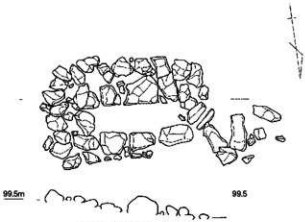




◎土坑04平・断面図

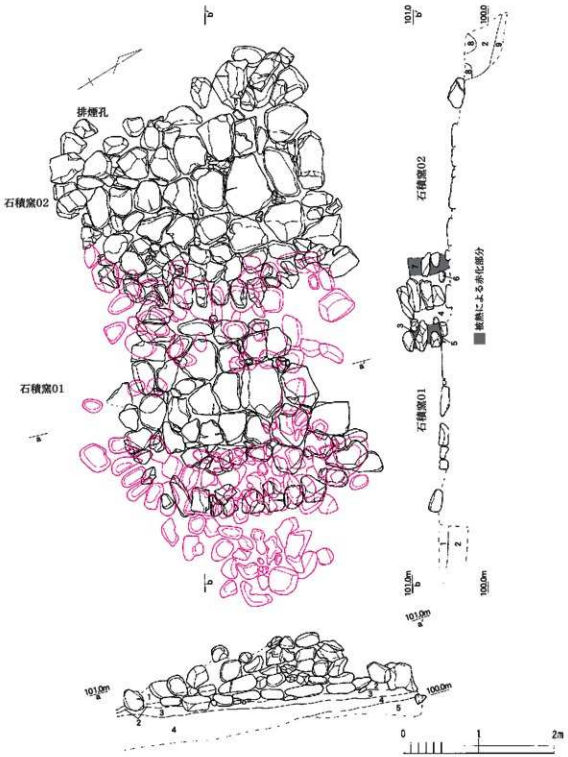
土坑04

1. 7.5YR4/4 黒褐色土　粗砂・φ0.5～1cmの礫微量含む。
2. 7.5YR4/4 暗褐色土　粗砂・φ0.5～2cmの礫少量含む。
3. 7.5YR6/6 橙色土　粗砂・φ0.5～3cmの礫少量含む。



◎石敷遺構03平・断面図

第9図　中世館部遺構図（縮尺1/40　◎印は1/50）



石積窯01　南北立面図
1．10YR7/6　明黄褐色　壁道部で固い。
2．10YR6/6　明黄褐色　焼き締まった土。焼土・炭多く含む。
3．10YR5/6　黄褐色土　焼土少量含む。
4．10YR2/2　黒褐色土　炭化粒含む。縄文土器出土層と対応。
5．10YR5/8　黄褐色土　地山か。

石積窯01・02　東西立面図
1．7.5YR4/6　褐色粘質土　熱により上半部赤化。貼床か。
2．7.5YR3/2　黒褐色土
3．5YR　赤褐色粘質土　壁が赤化。
4．7.5YR4/6　褐色土　直径φ0.5～1_の石粒含む。山土を充填。
5．7.5YR3/4　暗褐色土　焼土粒含む。
6．7.5YR4/4　褐色土
7．2.5YR4/6　赤褐色粘質土　壁材赤化。
8．10YR3/3　暗褐色粘質土　焼土粒・山石粒含む。窯外壁か。
9．7.5YR4/3　褐色粘質土

第10図　石積窯遺構図（赤線は窯壁部　縮尺1/50）

第４章　遺物

第１節　古代・中世の土器（第11図・第２表）

遺物は主として調査区北側の館部で確認されている。主な遺物の年代観は一乗谷朝倉氏遺跡の時期に併行する16世紀半ば～後半頃に限定される。遺物は越前焼甕・擂鉢、土師質皿と、若干の瀬戸焼で中国陶磁は確認されなかった。近世の唐津、古代の須恵器も含まれる。以下、産地毎に紹介する。

須恵器（第11図　１）　１は有台杯である。胎土は精良できめ細かい。今回の調査区では古代の遺構・遺物は他には確認されていないが、周囲で確認される可能性がある。

唐津焼（第11図　２）

胎土は赤褐色、ざっくりとしている。内外面とも無釉であることから火入類とも考えられる。

瀬戸焼（第11図　３）

確認されたのは１点のみである。２は口縁付近内外に灰釉を掛けるが、カセが激しく釉の剥落が著しい。内面には僅かに擂目が見える。

越前焼（第11図　11～19）

主なものは甕、擂鉢である。大甕は、16～18が口縁部、19・20は底部である。口縁部は総て同形で、口縁は外反し、肩は大角度で落ちる。口縁帯が完全に退化し、外面わずかに凸線で痕跡を残す。内面口縁下には１条に沈線を巡らせる。底部厚は19で2.4㎝、20で1.7㎝を測る。いずれも自然釉が付着する。Ａは甕体部、Ｂは小壺体部片である。Ａ・Ｂに施された刻紋はＶ期に多く見られる。

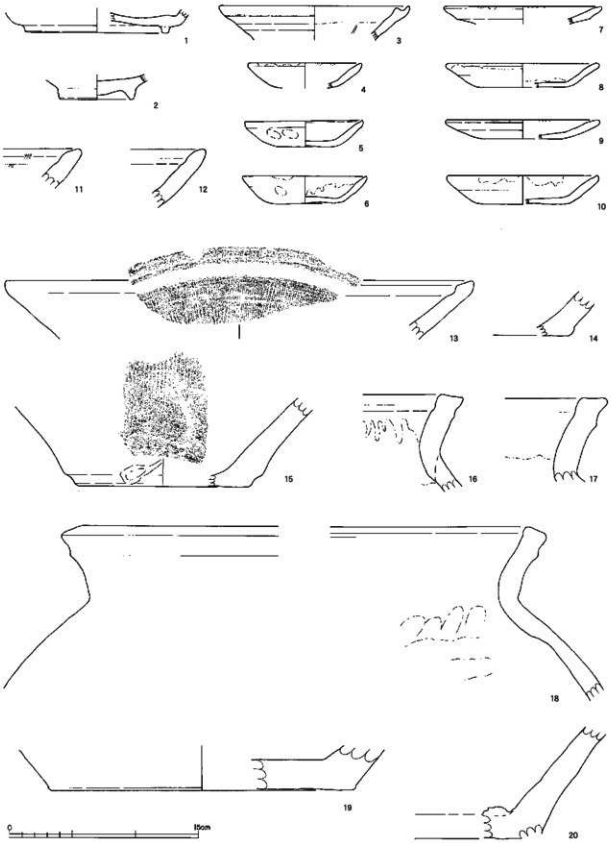
擂鉢は11～13が口縁部である。いずれも内面口縁直下に幅８㎜前後の明瞭な沈線を巡らせる。口縁形状、沈線の状況から朝倉期に併行するＶ期と考えられる。14・15は底部である。14は外面底部脇に２㎝幅の横方向削り痕を残す。摩滅した内面には擂目は見られない。12・13・15は焼成不良である。

土師質土器（第11図　４～10）

細片を含むと30点以上出土している。口径は9.5㎝（４～６）と12㎝（７～11）に大別される。成形は全て手捏ねである。６・８・９は見込に圏線を有する朝倉館分類のＤ類に相当する。４・５・７は同Ｃ類である。10は圏線が不明瞭だがＤ類と考えられる。５を除き全て口縁に灯芯痕を残す灯明皿である。

第２表　古代・中世の土器観察表

図版No.	地　区	遺構・層位	器種	土師質・瓦質土器 陶磁器・須恵器	法量（単位：m） 口径	底径	高さ	土師質・瓦質土器 陶磁器・須恵器	成形・調整・その他	備　　考	取上番号
1	B-4	黒色土層	有台坏	須恵器	—	10.1	(1.9)		胎土)精良緻密,白色砂粒含む		R56
2	A-4	平坦面２　流土	鍋	唐津	—	5.6	(1.9)	無釉	削り出し高台		18年度
3	A-3	平坦面２　流土	鉢底	瀬戸	15.0	—	(2.7)	灰釉		古瀬戸後(Ⅳ)期	18年度
4	A-2	土盛１　敷側表土	土師皿	あり	8.8	—	(2.0)	赤褐色	内)回しナデ,口つまむ。	朝倉C類?	R23
5	C-8	茶褐色土(表土下層)	土師皿	なし	9.2	3.9	2.15		内)回しナデ,口つまむ,見)圏線,外)口下回しナデ	朝倉C類	R02
6	A-2	切岸下　館内南縁土	土師皿	あり	9.7	4.95	2.3		内)回しナデ,口つまむ,見)圏線,横ナデ,外)口下回しナデ	朝倉D類	R19
7	A-2	切岸下　館内南縁土	土師皿	あり	12.3	—	(1.4)	明灰褐色	内)回しナデ,外)段あり回しナデ	朝倉C類	R14
8	A-2	切岸下　館内表土	土師皿	あり	11.8	6.6	1.9		内)回しナデ,見)圏線,外)回しナデ	朝倉D類	R15
9	A-2	切岸下　館内表色土	土師皿	あり	11.9	6.2	(1.5)	明橙色	内)回しナデ,見)圏線,外)上半回しナデ	朝倉D類	R16
10	A-2	切岸下　館内表土	土師皿	あり	11.7	6.5	2.25	赤褐色	内)回しナデ,口つまむ,見)圏線,外)回しナデ	朝倉D類?	R13
11	H-9	用水路　腐乱土	擂鉢	越前	—	—	(3.1)			Ｖ期	R31
12	A-10	流土	擂鉢	越前	—	—	(4.6)			Ｖ期	18年度
13	A-2	切岸下　館内南縁土	擂鉢	越前	36.7	—	(4.6)				R14
14	A-1	切岸下　館内表土	鉢	越前	—	—	(3.5)		底部脇煤ケズリ,高台なし		R10
15	A-2	切岸下　館内表色土	擂鉢	越前	—	13.2	(7.1)		焼成不良	Ｖ期	R16
16	A-2	切岸下　館内南縁土	甕	越前	—	—	(7.7)			Ｖ期	R15
17	A-2	切岸下　館内南縁土	甕	越前	—	—	(6.6)			Ｖ期	R19
18	A-3		甕	越前	51.1	—	(13.75)			Ｖ期	18年度
19	A-1・2	切岸下　館内表土	甕	越前	—	23.8	(3.5)		外面櫛刻紋「ヲ」　写真のみ	A-1・2区で接合	R10・19
20	A-2	切岸下　館内南縁土	甕	越前	—	—	(8.8)		外面櫛刻紋逆「山」　写真のみ		R18
A	A-1・2	土盛２　犬走り	甕	越前	最大径12.5	最小径0.8				Ｖ期?	18年度
B	C-8	平坦面４　包含層	小壺	越前	最大径7.5	最小径0.8				Ｖ期?	R04

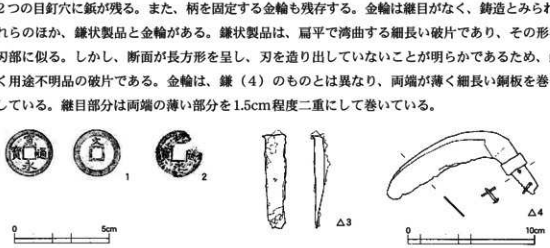


第11図　古代・中世の土器実測図（縮尺1/3）

第２節　金属製品（第12図、第３・４表）

金属製品は銭貨・楔・鎌などを確認した（第12図）。いずれも遺構に伴うものではなく、表土・流土中から出土したものである。銭貨は４点ある。すべて寛永通寶であり、そのうち２点を図示した（１・２）。１は「文」の背文を持つ、いわゆる文銭である。２は劣化が激しく銭文が不明瞭であるが、拓影により辛うじて判読できる。他２点は、文銭と２枚銹着したものである。楔（３）・鎌（４）は、出土状況から近世より下る時期の遺物である可能性が高い。鎌は、刃と茎がほぼ直角に屈曲しており、茎にある２つの目釘穴に鉄が残る。また、柄を固定する金輪も残存する。金輪は継目がなく、鋳造とみられる。

これらのほか、鎌状製品と金輪がある。鎌状製品は、扁平で湾曲する細長い破片であり、その形状は鎌の刃部に似る。しかし、断面が長方形を呈し、刃を造り出していないことが明らかであるため、鎌ではなく用途不明品の破片である。金輪は、鎌（４）のものとは異なり、両端が薄く細長い鋼板を巻いて輪にしている。継目部分は両端の薄い部分を1.5cm程度二重にして巻いている。



第12図　金属製品実測図（縮尺1/2　△印は1/３）

第３表　銭貨観察表

図版No.	銭種	初鋳	出土地点		計測値(mm)			備考	取上番号
			グリッド	遺構・地点	径	内区径	孔径		
第12図１	寛永通寶（文銭）	日本1668	A-2	表土	24.5	20	6	背文「文」	TBT-R13
第12図２	寛永通寶（古寛永）	日本1636	B-2	包含層？	24.5	20	7.5～9	銹による劣化激しい	TBT-R54
－	寛永通寶（文銭）	日本1668	D-3	流土	25	20	5.5	背文「文」	
－	寛永通寶（古寛永）	日本1636	A-2	畦１埋土	23.0・23.5	19.5・19.3	5・6	2枚銹着　両側表面	

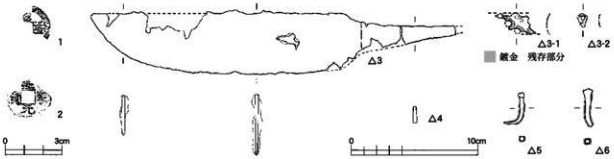
第４表　金属製品観察表

図版No.	種別	出土地点		計測値(mm)						備考	取上番号
		グリッド	遺構・地点	a	b	c	d	e	f		
第12図３	楔	B-4	表土下	長72	幅10～20	厚１～９				錆ぶくれ甚だしい	TBT-R55
第12図４	鎌	B-8	表土下	全長119.5	刃部長86	茎長43	金輪径19.5	金輪幅9.5	金輪厚２	目釘穴２、銹２、金輪	TBT-R41
－	鎌状製品	D-5	04上面	長65	幅15	厚さ4.5				錆ぶくれ甚だしい　断面長方形	
－	金輪	A-7	表土	径18	幅５	厚１				細長い板を巻いて輪にする。	

附　栗住波谷口遺跡の金属製品（第13図、第５・６表）

平成13（2001）年に起きた福井豪雨の洪水被災のため、平成19（2007）年刊行の福井県埋蔵文化財調査報告第97集『栗住波谷口遺跡　中部縦貫自動車道建設に伴う調査６』に掲載できなかった金属製品をここに掲載し、報告の責を果たす。

主な遺物は銭貨２点（１・２）・飾り金具（３）・庖丁（４）・釘３点（５・６、他１点は頭部と先端を欠くため図を掲載しない。）である。飾り金具（３）は部分的に鍍金を残し、紋様は不明ながら魚々子打や線刻による彫金がなされる。断面が円弧を示し、釘穴と思しき穴もみられるため棒状のものに被せたことが推測される。飾り金具（３）はSK30、釘（６・他１点）はSD68から出土し、その他は包含層から出土する。なお、栗住波谷口遺跡は16世紀を通して存続した館跡であり、SK30・SD68は16世紀中ごろの遺構とみられる。



第13図　栗住波谷口遺跡の金属製品実測図（縮尺1/2　△印は1/3）

第５表　栗住波谷口遺跡の銭貨観察表

図版No.	銭種	初鋳	出土地点		計測値(mm)			備考
			グリッド	遺構・地点	径	内区径	孔径	
第12図 1	至道□□	北宋995	E-8	包含層	(14～17)	(1.1～1.3)	(4.5～5.5)	1/4残存　至道元寶
第12図 2	熙寧元寶	北宋1068	E-7	包含層	(23.5)	20	7	周囲欠損

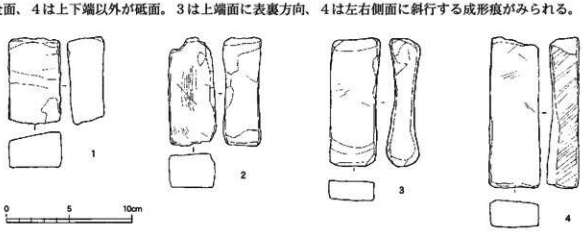
第６表　栗住波谷口遺跡の金属製品観察表

図版No.	種別	出土地点		計測値(mm)						備考
		グリッド	遺構・地点	a	b	c	d	e	f	
第13図3-1	飾り金具	G-7	SK30	幅32	高17	厚1				金象嵌？による模様　孔あり
第13図3-2	飾り金具	G-7	SK30	幅8	高10.5	厚1				金象嵌？による模様　孔あり
第13図4	鉋？	E-7	褐色粘土下	全長286	刃部長213	刃部幅48	茎長72	茎幅12.5	厚3前後	一部、柄の木質残る
第13図5	釘	－	－	長(25)	太4	頭高4	頭幅4.5	－		頭巻釘　先端屈曲
第13図6	釘	－	SD68	長(31)	太4	頭高4.5	頭幅7.5			頭巻釘　先端欠損
－	釘	－	SD68	長(36.5)	太4～6	頭高－	頭幅－			頭・先端欠損

第３節　石製品（第14図、第７表）

砥石が５点ある。石質は凝灰岩４点と砂岩１点である。全てＡ７区下段平坦面から出土した。

砥石（１～４）　石質からいずれも中砥と考えられる。１と２は角柱形を呈し、上下端以外が砥面。１は、表面中央が短軸方向で帯状に凹む。２は、下端面に斜行する削り痕がみられる。また表面に長軸方向、裏面に不定方向の擦痕がある。３と４は、扁平な長方形を呈し、３は側辺が湾曲して反る。３は全面、４は上下端以外が砥面。３は上端面に表裏方向、４は左右側面に斜行する成形痕がみられる。



第14図　石製品実測図（縮尺1/3）

第７表　石製品観察表（法量はcm）

番号	器種	地区	遺構・層位	石質	器長	器幅	器厚	遺存	番号	器種	地区	遺構・層位	石質	器長	器幅	器厚	遺存
1	砥石	A-7	平坦面4 表土	凝灰岩	7.0	4.2	2.9	完形	3	砥石	A-7	平坦面4 表土	砂岩	10.4	4.0	2.6	完形
2	砥石	A-7	平坦面4 表土	凝灰岩	8.2	3.0	3.0	一部欠	4	砥石	A-7	平坦面4 表土	凝灰岩	12.1	4.1	2.1	完形

第４節　縄文・弥生時代の土器

ここでは、包含層から出土した縄文時代・弥生時代の土器を扱う。後述する石器も含め、出土量は総じて少ない。傾向として、出土位置は丘陵緩斜面となる調査区北東部のＢ・Ｃ-６～８区を中心とし、出土層位は表土直下の暗褐色土・黒色土を中心とすることが認められる。しかし、時期・時代ごとに分離せず、混在して出土すること、いずれも小片であり、摩滅が顕著であることなどから、周辺からの流れ込みと考えられる。

１　縄文土器（第15図１～６）

合計24点出土した。器種はすべて深鉢である。このうち、有文系土器は第15図１の１点のみで、これ以外はすべて無文系土器である。無文系土器では縄文施文土器が大半を占める。

１は、直線的に開く口縁部片であり、口唇部に背の低い波状貼付文を配す。口縁端部は丸く収める。外面はナデ調整であり、内面には指頭圧痕が残る。胎土に微細な白色粒子を多く含む。２～５は、縄文施文のみの無文系土器である。２・３・５は、斜縄文ＬＲを施す。２は、口縁部片であり、端部を丸く収める。３は、外反して立ち上がる胴部片である。胎土に砂粒を多量に含む。その他に同一個体と考えられる破片が５片出土している。４は、０段多条の縄文ＲＬを部分的に施し、縄文施文後に丁寧なナデを施す。有文系土器の可能性がある。外面には炭化物が若干付着する。５は、胴部片で、２とともに胎土に砂粒をほとんど含まない。６は、外面にナデを施す素文土器であり、やや内傾する胴部上半片である。

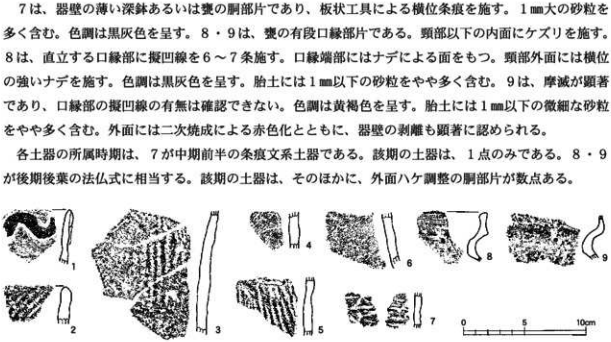
各土器の所属時期については、小片のため特定は困難であるが、縄文や胎土などから、おおむね、１～３・５・６は中期、４は後期あるいは晩期に所属するものと考えられる。このうち、３については、地文が節の細長い縦位縄文であり、胎土に砂粒を多く含む点などから、船元Ⅲあるいは、Ⅳ式に相当するものと考えられる。

２　弥生土器（第15図７～９）

合計７点出土した。縄文土器より少ない。

７は、器壁の薄い深鉢あるいは甕の胴部片であり、板状工具による横位条痕を施す。１㎜大の砂粒を多く含む。色調は黒灰色を呈す。８・９は、甕の有段口縁部片である。頸部以下の内面にケズリを施す。８は、直立する口縁部に擬凹線を６～７条施す。口縁端部にはナデによる面をもつ。頸部外面には横位の強いナデを施す。色調は黒灰色を呈す。胎土には１㎜以下の砂粒をやや多く含む。９は、摩滅が顕著であり、口縁部の擬凹線の有無は確認できない。色調は黄褐色を呈す。胎土には１㎜以下の微細な砂粒をやや多く含む。外面には二次焼成による赤色化とともに、器壁の剥離も顕著に認められる。

各土器の所属時期は、７が中期前半の条痕文系土器である。該期の土器は、１点のみである。８・９が後期後葉の法仏式に相当する。該期の土器は、そのほかに、外面ハケ調整の胴部片が数点ある。



第15図　縄文・弥生時代の土器実測図（縮尺1/3）

第5節　石器

1　構成と分布

第8表　石器組成表

	石鏃	石匙	剥片	打斧	磨斧	敲石	凹石	磨石	計
安山岩	1		5	6	1			2	15
チャート	1	1	2						4
砂　岩						1	1	4	6
計	2	1	7	6	1	1	1	6	25

石器の構成を第8表に示す。狩猟具・工具・土掘具・調理具があり、少量だが多様な道具類がある。石質は、安山岩が6割でチャートや砂岩もある。器種別では、石鏃や石匙にチャートが多く、他は安山岩や砂岩が用いられている。九頭竜川流域では、石質構成で安山岩が8割以上となる遺跡例が多いが、小形の剥片石器にチャートが多用されている。石器の分布は調査区北東部にまとまり、谷へ流れ込んだ状況で出土した。

2　石器の形態

石鏃（1、2）　1は凹基無茎鏃で、三角形状を呈す。両面に調整され、基部に抉入が作出される。2は平基無茎鏃で、基部が平らに作出される。周辺中心に調整され、両面中央に素材面を残す。

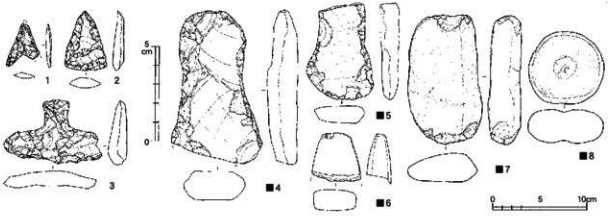
石匙（3）　横型で、上方につまみ状の基部が作出される。基部は表裏の周辺、刃部は表面側へ急斜に調整される。また、右端に節理面と両面中央に素材面を残す。

打製石斧（4、5）　共に側辺中程のやや上位に抉入をもち、分銅形を呈す。基部から刃部へ側辺が緩く開き、周辺中心に調整される。5は、基端に素材面を残し、刃部が磨滅している。

磨製石斧（6）　定角式で、基部がすぼまる。側辺や基端に面が作出され、断面は扁平な方形を呈す。

敲石（7）　扁平な楕円礫が素材。表裏の上下端に敲打による複数の剥離面がある。

凹石（8）　扁平な円礫が素材。表裏に磨面をもち、中央に敲打痕があって凹む。



第16図　石器実測図（縮尺1/2　■印は1/4）

3　小結

各器種は全て単独個体であり、調査地で石器は製作されていない。他所で石器を製作し、製品が搬入されている。そして、調査地周辺で使用し廃棄されたと考えられる。狩猟・工具・土掘・調理等と道具類は多様だが少量なため、短期的で小規模な集落と推察される。また、石匙や石斧類・凹石の形態や組成からみて、縄文時代後期と考えられる。

第9表　石器観察表（法量はcm）

番号	器種	地区	層位	石質	器長	器幅	器厚	遺存
1	石鏃	B-7	集石付近	安山岩	2.3	1.8	0.3	基端欠
2	石鏃	B-7	黒色土	チャート	3.1	2.2	0.6	完形
3	石匙	B-4	黒色土	チャート	3.4	5.2	1.0	完形
4	打製石斧	D-4	包含層	安山岩	16.3	9.7	3.4	刃部欠
5	打製石斧	C-7	黒色土	安山岩	10.3	7.2	2.0	完形
6	磨製石斧	A-8	黒色土	安山岩	5.2	5.3	2.6	下半欠
7	敲石	B-7	黒色土	砂岩	13.7	7.9	3.5	完形
8	凹石	A-2	表採	砂岩	7.6	7.9	3.5	完形

第５章　まとめ

１　竹原弁才天遺跡の変遷

調査から得られた遺跡の変遷について略述する。

今回調査された竹原弁才天遺跡では、縄文から弥生時代について遺構は確認されなかった。但し、遺物の分布状況が調査区東側に偏るため東、或いは背後（南側）の山を迂回し河内川と平行に南にこの時期の遺跡が展開すると考えられる。古代については須恵器坏がわずか１点出土した程度で、この付近において古代遺跡の存在感は希薄である。中世後期、16世紀代に至り館が造られることによりはじめて本遺跡付近が開発されたと考えられる。今回の調査では館本体が調査対象外のため全容を窺えなかったが、逆に本体部が破壊を逃れたことは僥倖である。中世館が廃絶した17世紀以降、再び自然に還り、或いは田畑として利用された。降って太平洋戦争前後、燃料不足を補うため南河内川谷等で多くの炭焼窯が築かれたようである（『上志比村史』1978）。本遺跡で確認された石積窯01・02もこの時期に築造された可能性が考えられる。

２　館部背後の構造（第17・18図、第10表）

今回調査されなかった中世館本体に対し、山側にあたる館背後（南側）の堀・土塁等施設が比較的良好な状態で検出された。これらの施設は付近の中世館遺跡でも同様に確認されており、竹原弁才天遺跡の堀・土塁等と比較しながらみてゆきたい。

例として取り上げる館跡は、藤巻館遺跡（福井県埋蔵文化財調査報告第95集 －中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査 ５－2007年３月）、栗住波谷口遺跡（福井県埋蔵文化財調査報告第97集 －中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査 ６－2007年３月）、藤巻多珍坊遺跡（福井県埋蔵文化財調査報告第101集 －中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査 ７－2008年３月）である。なお、竹原弁才天遺跡の西隣りに並ぶ東ノ館・新右衛門館・西ノ館も格好の資料であるが、報告書刊行済みの遺跡のみ対象とした。

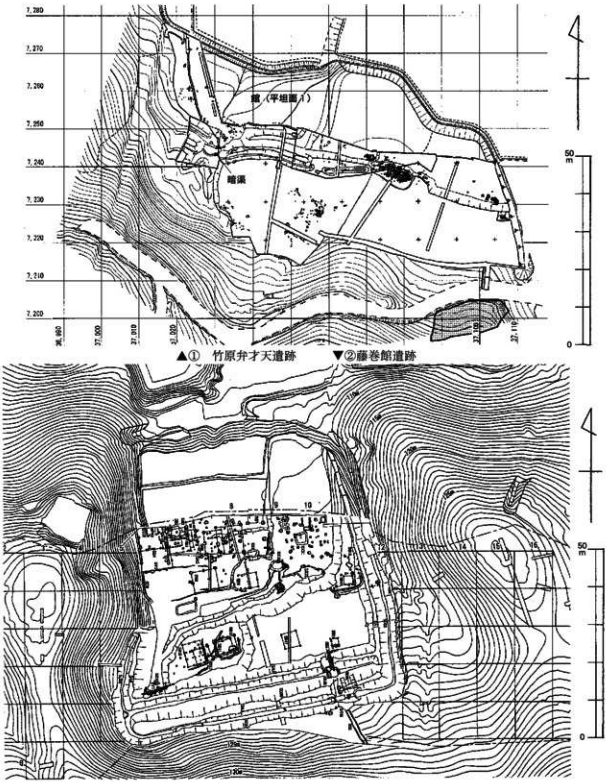
４つの館跡の年代観を遺物から確認する。藤巻館遺跡は、越前焼ではＶ期が中心である。瀬戸美濃焼では若干古瀬戸後期のものが含まれるが大半は大窯期である。志野は確認されていない。唐津焼は胎土目のみである。貿易陶磁は青磁と共に染付が多いが漳洲窯系のものは見かけない。以上から16世紀後半が最盛期とみられ、16世紀末から17世紀最初頃には終焉を迎えたとみられる。栗住波谷口遺跡も藤巻館と類似した傾向を示すが、瀬戸美濃焼では大窯期前半がやや多く、唐津焼や志野は確認されていない。藤巻多珍坊遺跡も同様の傾向ながら漳洲窯系染付皿がＩ地区で出土している。竹原弁才天遺跡も又、同様の傾向を示す。以上よりいずれの館も、志野・唐津焼が極端に少なく、織部に至っては全く出土しておらず、瀬戸美濃焼大窯製品が大勢を占めることから、一乗谷朝倉氏遺跡と平行する16世紀代を盛期とし、16世紀末～17世紀初頭までには廃絶するとみられる。各館廃絶時期は北庄城に封ぜられた小早川秀秋（1598～99年在城）による太閤検地（兵農分離含む）や関ヶ原の戦い後封ぜられた結城秀康（1601年～）による近世支配体制の確立と軌を一にする。

遺構についてみてゆく。土塁はいずれも高さ２ｍ前後、堀は幅３ｍ前後が標準的だが、藤巻館は二重堀で規模も大きい。いずれも平坦地であれば区画・防禦に充分な規模だが、背後の山が迫る状況を勘案すると防禦上心許ない。このような状態から『栗住波谷口遺跡』報告書では堀について「防御用でなく、背後の山から流れくる雨水を止め、排水することが目的」と考察されている。他の館に対し規模が極めて小さい竹原弁才天遺跡の土塁・堀では防禦用としてはあまりにも脆弱であることから背後の山か

らの水対策と考えるのが妥当であろう。

次に土塁・堀で受け止めた水を、山下（北）に排水する必要がある。栗住波谷口遺跡では館西側の区画を兼ね、山下（北）へと水路SD04を設定し、「排水」という目的を達成している。しかし、竹原弁才天遺跡や藤巻館遺跡ではいずれも館南西隅付近で谷筋を土塁でダム状に塞ぎ、暗渠を介し館内に水の道を通す点が注目される。「防禦」用の堀であれば土塁の下を潜る必要はなく又、水路の内側で土塁は確認されていない。「排水」が目的であれば、谷筋を土塁で塞ぎ、わざわざ暗渠を経て水路を館内に通すことは大雨等の際、水害をもたらす基となり常に危険性を抱えることになる。もちろん館左右２つの尾根を天然の土塁として利用するために尾根間の谷を利用し、平坦面を造ったとも考えられる。藤巻館遺跡・栗住波谷口遺跡の平面図をみれば一目瞭然といえる。水害より３方を囲み、守備を重視した結果の谷部の占地ともいえよう。しかし館外周に水を回さず、敢えて館内へ導水することに積極的な理由を見出すとすれば「上水」の確保が考えられる。藤巻館遺跡の石組み暗渠SZ1は館内の暗渠先端に直径約60cmの丸太を刳り抜いた井筒状の施設を配する丁寧な作りである。また４つの館遺跡では全く井戸遺構が確認されなかったことが共通する。必要な生活用水確保を考える時、取り込まれた谷筋を天然の上水道とし、井戸を必要としなかったことが推定される。或いはこの付近に共通する井戸掘削による水の確保が困難な理由があるため水害の危険を伴う谷筋の館内への取り込みという形式を生み、水を常時得られる良好な谷筋の有無が館の建設地を決める重要な条件となったとも考えられる。本報告のため資料提示を避けた西ノ館・新右ェ門館・東ノ館の各館跡も谷筋を館内部に取り込む構造であり（１頁第１図参照）、竹原弁才天遺跡・藤巻館等と同一の設計思想を看取できる。藤巻多珍坊遺跡は調査区外のため想像となるが、区外南東から流れる溝は、土塁に現代の暗渠といえるパイプを通し、水を北西へ送る。これは館施設の遺構を利用したとも考えられる。又、栗住波谷口遺跡では谷筋が確認されていないが、現栗住波川が本来谷筋であったとも推定される。又、土塁SA03の南東部が深くえぐれた平面形状を示しており、館内への水流の取り込み口との関わりも想像させる。

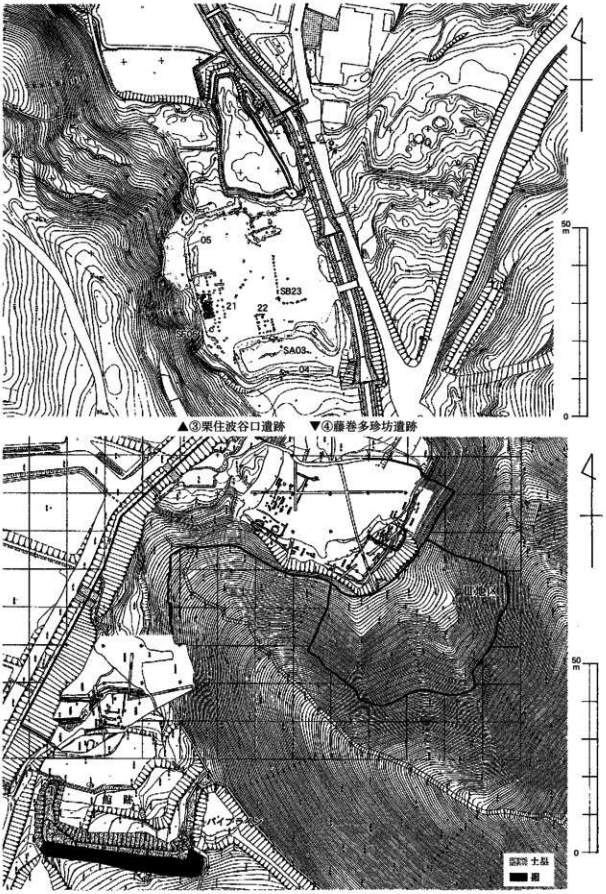
最後に館内に取り込まれた水はどのように利用されたのか。竹原弁才天遺跡では水筋が暗渠を経てすぐに調査区外の館内（平坦面１）に消えてゆくため詳細は不明だが、藤巻館ではある程度追跡が可能なため憶測を交えてみてゆこう。15～16世紀代の館の空間構成は、京都の足利将軍邸（花の御所等）を基本とした。中央のスタイルを志向した地方では館主の身分・権力・財力に応じ空間構成はそのままで適宜簡略化・小型化し建造した。具体的には、正面の表門を潜り、広場を介して中門廊から主殿（寝殿）に至る「ハレ」空間。その背後には常御殿や厨等「ケ」空間。さらに中世後半には会所や亭等「ケ」の「ハレ」とも言える中間的な空間の３つを配することとなる。藤巻館で調査された部分は、建物規模や表と繋がる広場（庭）のないことから「ケ」空間と考えられる。注目される水筋は、暗渠SZ1を介し館内に進入した後、溝等の明確な遺構が確認できない。しかし、全体平面図でみると、SD5を介し北へ向かうものと、SB12等の立つ高台直下を東へ向きを変え、SX10やSX22に流れ込んでいたと考えられる。石組方形池のSX10は断定できないが、SX22は園池の可能性が高い。園池を想定させるSX10・22や高台に立つ礎石建物SB12や14等は会所や亭的な様相を持つ。SX21やSB8・9のみの広場を含め、会所的空間を想像させる。特にSB14付近では茶臼や石製風炉が出土しており空間の性格を考える資料となる旨同報告書でも指摘されている。ある時期（３期）には園池やお茶の水専用に暗渠SZ2を別に造作された可能性も含めて南側の山から流れ出す谷水は、生活用水としてのみならず、身分・権力を象徴する施設維持のため必要欠くべからざるものであったと思われる。



第17図　中世館比較平面図１（総て縮尺1/1,000）　各遺跡報告書より引用縮小

第10表　各館防御施設比較一覧

遺跡名	遺物による時期（世紀）	土塁		堀			堀	
		遺構番号	高さ	遺構番号	幅	断面形態	遺構番号	形態
竹原弁才天遺跡	（15～）16後	土塁1・2	0.7m	堀1・2	1m	薬研掘り		石組暗渠
藤巻多珈坊遺跡	16後～17初		2m		3m		未調査地のため詳細不明	
栗住波谷口遺跡	（15～）16前	SA03	2m	SD04	3m	逆台形	SD04	屈曲堤開塁堀
	16後	同上		同上			SD05	屈曲塁薬掘り溝
藤巻館遺跡	16後～17初	SA2	2.5m	SD26	5m	薬研掘り	SZ1	石組暗渠・集水施設
		SA3	2.5m	SD24	5m	逆台形	SZ2	石組暗渠



第18図　中世館比較平面図２（総て縮尺1/1,000）

栗住波谷口遺跡では園池？SF06に張り出し、間仕切りの多い礎石建物SB21や礎石建物SB22等は会所的性格を想定させる。大型礎石建物SB23や下面（２面）のSB41は間仕切りが不明なため性格を断定し得ないが主殿や逆に常御殿等の可能性が考えられる。このうち北へ流れるSD05は、SF06の西際を通ることから単なる排水用ではなくSF06に給水もしていた可能性がある。そうならば、現在谷筋が流れ込む痕跡がみられないSD04南西側に湧水も含め一定量の水量が存在した可能性が想像される。西面側は、防禦に最適な切り立った崖であるが、２期（前期）にはその直下に堀ともいえる深く幅の広いSD04（西側）が掘削された理由は、常時の水流が原因ではないだろうか。

志比荘は北国街道の経済都市北庄から分岐し、九頭竜川沿いに大野を経由して美濃方面や白山信仰の拠点平泉寺へ往来する重要な交通路上であった。このため、特に平泉寺は街道沿いの志比を重視していたと考えられる。上志比では平泉寺末と称する寺坊跡が多く、平泉寺の影響力の強さを窺い知ることができる。一方、中世志比荘で実質的支配力を持っていたのは地頭波多野氏であった。六波羅探題の評定衆や室町幕府でも奉公衆から評定衆となる等重要な役職を代々担う実力者（家）であった。永平寺をはじめ真宗の専照寺・誠照寺の建立や、一族から本覚寺（福井市）主や近世には福井藩士を出す等血族が越前に分派し（『永平寺町史』第二編第三章1984年）、宗教（新興・旧来）勢力とも積極的に支持・交流し、基盤を作った。当然、中世志比をはじめ越前に大きな力を持つ平泉寺にも６世通郷から分かれた郷汎が玉泉坊の祖となり、寺内で実力者としてお互い密接な関係を保ったと思われる。

16世紀半ばから後半にかけ、室町幕府の衰退とともに波多野氏も弱体化した。16世紀半ばから後半にかけ中央の記録にその名が見られなくなり、新たに朝倉氏を頼り家臣として命脈を保った。また、16世紀後半にはさしもの平泉寺勢力にも翳りが見えていた。このような時代背景の元、竹原弁才天遺跡をはじめ館群は九頭竜川に流れ込む川筋毎に密集して造られた。何れの館も同じ設計思想・条件で造られ、出土遺物の年代観から16世紀代、特に後半が最盛期と見られる。この一時期に山裾から平地（河岸段丘）への変換点に、館群が横一線・数珠繋ぎに密集する光景が一連の調査から明らかとなった。ではなぜ短期間に館が林立したのか？これについて次の案が考えられる。

① 個々の館が独立したものではなく、機能分化した空間の集合体であること。

② 求心力のある本堂的中心施設とこれに追随する房舎群。

③ 政治情勢の結果による小領主＝中小館の乱立。

等考えられるが、理由の最たるものは平泉寺・波多野氏の支配力がゆるみ、（岩田隆氏は平泉寺遺跡の遺物群について、個人的感想ながらとして「16世紀後半では遺物の質・量がそれまでに比べ減少するように感じられることから勢力が衰えはじめたのではないか」と指摘された。）権力の伸張拡充を図る朝倉氏や一向宗勢力が在地の寺坊や波多野一族あるいは近在有力者と各個に手を組んだ。新・旧様々な権力を背景とした勢力が乱立し、各々が権力のシンボルたる館を造営、館団地の様相を呈したと想像する。

以上、ここでは問題を提起のみで措き、近日正報告が刊行される大月前山遺跡や西の館等の調査成果を待って、改めて論じたいと思う。いずれにせよ今回の調査成果が大であったとは言い難いが、今後志比荘の地域史研究や文化財悉皆調査等の進展が竹原弁才天遺跡の意義を大きくするものと考えられる。

写　真　図　版

図版第一　遺跡

16年調査区全景（合成）

↓九頭竜川　↓館部（林部分）

16年調査区B　16年調査区

図版第二　遺構

(1) 館内切岸

(2) 暗渠　水口（北より）

(3) 土塁１・堀１（西より）

(4) 土塁１・堀１（東より）

(1) 暗渠　上部土塁除去後（北より）

(2) 暗渠　蓋石除去後（北より）

(3) 石敷遺構３

(4) 石積窯１背面（右排煙孔）

(5) 石積窯壁除去後（手前石積窯２）

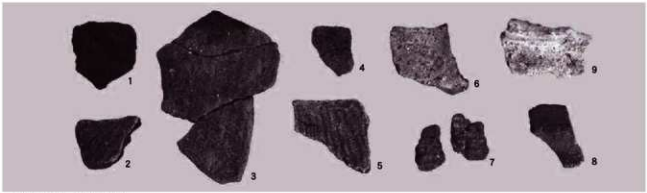
図版第四　遺構

(1) 16年調査区　平担面４（東より）

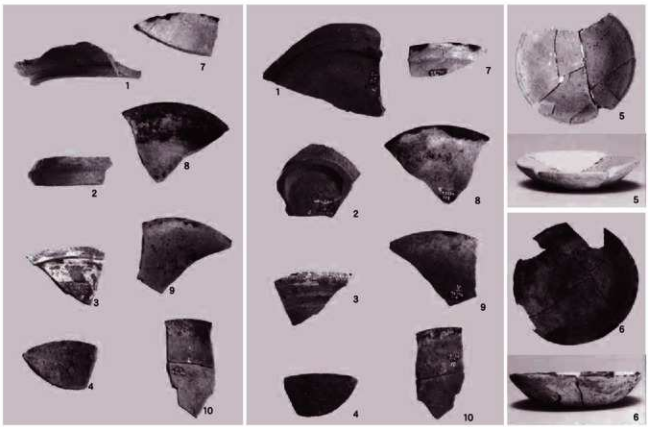
(2) 土壇２・堀２（東より）

(3) 16年調査区Ｂ　全景（南より）

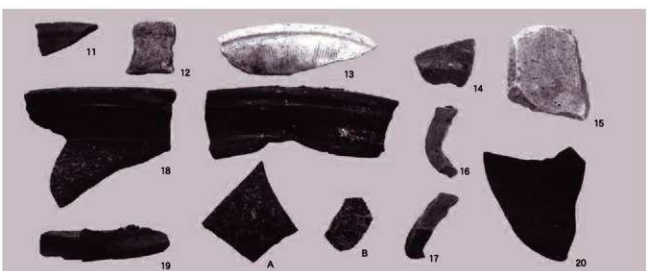
(4) 堀３（西より）



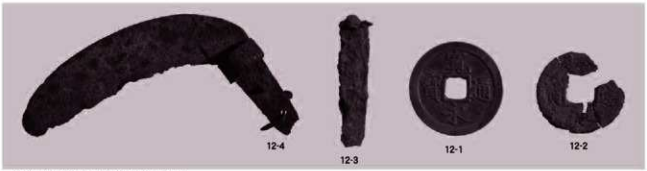
(1) 縄文・弥生土器



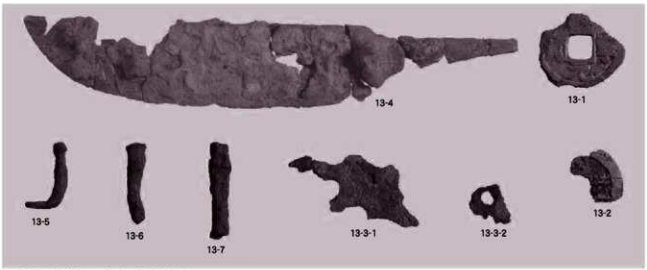
(2) 中世陶磁器・土師質皿



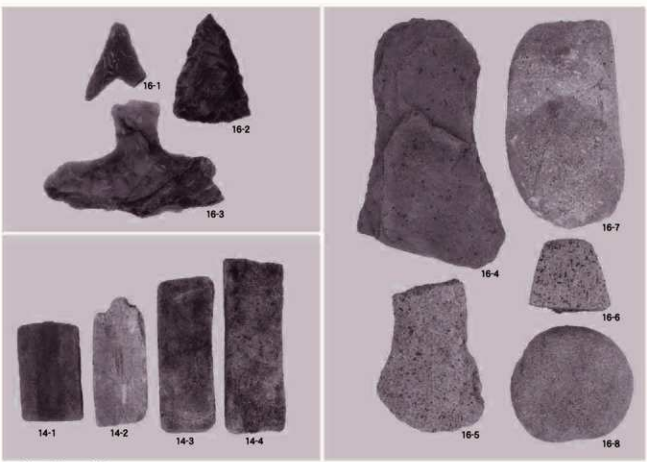
(3) 中世越前焼



(1) 竹原弁才天遺跡の金属製品



(2) 栗住波谷口遺跡の金属製品



(3) 石器・石製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たけはらべんざいてんいせき
書 名	竹原弁才天遺跡
副 書 名	中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査９
巻 次	
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第111集
編 著 者 名	月輪泰　河村健史　山本孝一　御嶽貞義　田中勝之
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町4-10　℡0776-41-3644
発 行 年 月 日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
竹原弁才天 遺跡	福井県 吉田郡 永平寺町 竹原	18322		36° 3′ 59″	136° 24′ 34″	20040614～ 20041224 20060705～ 20060821	2,650	中部縦貫自動車道建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹原弁才天 遺跡	館 散布地	中世 弥生 縄文	堀・土塁・石組 暗渠など	土師質皿・越前焼・石器・縄文土器・弥生土器・須恵器・金属製品など	調査されたのは、館の南面（背面）のみで本体部分は未調査。

要　約

九頭竜川左岸の山裾に東西の帯状に広がる遺跡の１つ。

縄文・弥生時代は、遺物のみ確認された。遺物の出土状況から遺構は調査区北側の平坦地に広がると思われる。

古代も遺物のみ確認された。

中世は、堀・土塁・切岸・導水暗渠等確認され、館の背面部分が明らかとなった。遺物は越前焼・土師質皿等出土する。時期は出土遺物から15世紀後半から16世紀代と考えられる。なお、館跡の本体部分は今回の調査区域外である。

福井県埋蔵文化財調査報告　第111集

竹原弁才天遺跡

－ 中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査９ －

平成22年３月15日　印刷
平成22年３月31日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152　福井市安波賀町4-10
印刷　株式会社　ワタナベ印刷
〒919-0461　坂井市春江町江留上緑8-4